

関口安義著 『芥川龍之介新論』

河内, 重雄
九州大学大学院人文科学研究院 : 専門研究員

<https://doi.org/10.15017/27420>

出版情報 : 九大日文. 20, pp.102-104, 2012-10-01. 九州大学日本語文学会
バージョン :
権利関係 :



関口安義著『芥川龍之介新論』

KOUCHI SAIEGO
河内 重雄

二〇一二年、芥川龍之介の生誕百二十年、没後八十五年の節目にあわせて、関口安義氏の名著『芥川龍之介新論』が刊行された。二〇〇七年に刊行された、「義仲論」、「忠義」、「或日の大石内蔵之助」、「戯作三昧」、「首が落ちた話」、「地獄変」、「馬の脚」、「支那遊記」を扱う『世界文学としての芥川龍之介』（新日本出版社）の続編である。『芥川龍之介新論』では、二十一編の論考が七つの章に分けて配列されている。章題は、「第Ⅰ章 弱者への眼」、「第Ⅱ章 切支丹宗徒への眼」、「第Ⅲ章 不条理への眼」など。「第Ⅰ章 弱者への眼」は、「奇怪な再会」、「おぎん」、「報恩記」からなるごとく、各章は三節からなる。

本書で最初に扱われる「奇怪な再会」は、一般に怪奇小説の観点から論じられる。本書では、「奇怪な再会」は「第Ⅳ章 怪異・異形への眼」ではなく、あえて「第Ⅰ章 弱者への眼」という章題の下に論じられている。それによって、怪奇的な要素だけでなく、日清戦争とその前後の時代に、弱者として生きること余儀無くされた者たちの抱える問題をも、本作品に見出すことに成功している。「奇怪な再会」の次に扱われている「おぎん」も、「第Ⅱ章 切支丹宗徒への眼」ではなく、「第Ⅰ章 弱者への眼」に入れて論じられているなど、先行研究では

あまり注目されてこなかった文脈にも留意し、各作品が論じられている。この点に、本書の特色の一つがある。

また、「第Ⅴ章 友人への眼」では、中学からの芥川の友人で、戦後にコーヒー栽培に関する論文で農学博士号を得た山本喜誉司きよよしに、特に一節が割かれている。中学時代や北京、ブラジルでの、芥川と山本喜誉司の交わりが、資料を基に詳しく述べられている。山本喜誉司を本格的に扱った初の論考であり、この点にも本書の特色の一つが認められよう。

以上、個別的な特色について簡単に述べたが、本書には、全体に通底する大きな特色がある。それは、世界文学という観点から芥川作品を解釈しようとする時に見えてくる文脈を、検討している点にある。このことは、本書が『世界文学としての芥川龍之介』の続編であり、本書の「はじめに」に、「本書は世界文学という視点から、芥川テクストに新たに切り込んだものといえようか」とあることから明らかであろう。

関口氏は本書の「再見『支那遊記』」で、「一国の一人の作家の文学が世界文学となるには、翻訳がいかに普及するかにある。」と述べている。氏によると、現在、芥川作品の翻訳は世界四十ヶ国を上回り、翻訳数は六百に及んでいる。翻訳言語は、英語、ロシア語、ドイツ語、フランス語、イタリア語、スペイン語、ポルトガル語、オランダ語、デンマーク語、マジヤール語、ヒンディー語、中国語、韓国語、ベトナム語と、多岐にわたる。芥川作品は翻訳を通して、世界中で読み得る状況にあると考えられ、世界文学と呼ぶことは可能と言えよう。

様々な言語に翻訳され、広く読まれる、つまり世界文学とされる上で、何が重要か。ポイントの一つは、それらの作品が、普遍的な問題を扱っていると見なし得るという点にある。氏が「世界文学という視点から」芥川作品を解釈するのは、多くの芥川作品に、普遍性を志向するものがあることを示すためであろう。

普遍的なものを作中で創造しようとしたのは、芥川に限ったことではない。例えば、芥川に多大な影響を与えたとして、氏が本書で度々言及する森鷗外の「高瀬舟」にもそのような要素がある。小説の最後で、同心の庄兵衛は、喜助の行為は奉行の判断したように「人殺し」か、今日言うところの安楽死のようなものかと迷い、自分より「上のもの」「オオトリテエ」＝奉行の判断に従うしかないと思うが、「腑に落ちぬもの」が残る。そうである以上、奉行よりも「上のもの」（より高い次元）に向かうことになると考えられよう。小説にはこの他にも、「この根柢はもつと深い處にあるやうだ」といった表現がみられるが、これらの表現は、あらゆる価値観や権威、考えを一意見(特殊)にしてしまう、普遍Xとでも言うべき超越的なものと考えられる。Xである以上、読者に何かを代入するよう促しはするが、どのような意見を入れても、これら「上のもの」、「もつと深い處」は常に残り続ける。鷗外は「高瀬舟」発表以前に、小説「かのやうに」を発表しているが、まさに個々の考えよりもつと深い、何か普遍的・超越的なものがある「かのやうに」書いていると言えよう。近代文学が抱え込んだ普遍性の問題を、作品

に即して考えることは、我々にとつて重要な課題と考えたい。

芥川作品にも、例えばキリスト教の棄教をテーマとする「おぎん」に「あらゆる人間の心」とあるごとく、初期の「羅生門」から晩年の作に至るまで、普遍的なものを主要なテーマとするものが認められる。芥川作品における普遍性の問題を考える時に、氏が注目するものの一つは、宗教、特にキリスト教である。

周知のように、キリスト教は仏教、イスラム教と並び、世界宗教の一つとされている。神の前において、人間はみな罪人として平等とすることで、普遍的人間観の普及に大きな影響力をもってきた。氏は芥川のキリスト教の受容について考察する上で、恒藤恭など芥川の友人達にまで調査対象を広げる。恒藤恭の一高時代の日記『向陵記』や長崎太郎の日記、芥川書簡などの数々の新資料が、徹底的に調査されている。その上で、芥川が関わりをもった教会や牧師(東郷坂教会、牧師シュレーデルなど)や、聖書等に、詳細な検討を加えている。このような作業は、芥川作品を普遍性というテーマに即して解釈する上で、基礎的な作業と言えよう。芥川のキリスト教受容については、「おぎん」や「尾形了齋覚え書」、「奉教人の死」などの本書の作品論だけでなく、「第V章 友人への眼」でも詳しく述べられている。また、氏の労作『評伝長崎太郎』(平成二十二年十月 日本エディタースクール出版部)などを併読すれば、より細かな情報を得ることが出来る。

普遍の対義語は特殊、それ故、普遍が問題となる時には、特殊や個別性も問題となり得る。作品における普遍的なものや強

調するあまり、作中に認められる特殊な、個別的な事柄・要素への目配りがなおざりになることは、珍しくない。この点、氏の研究は眼が行き届いている。「報恩記」論における日本の封建制度や、「おぎん」論における東西（日本とヨーロッパ）の違いなど、作品に読み取れる日本の文化や制度の特殊性についても考察し、それらが普遍的なものとどのように関わるかが慎重に検討されている。芥川テクストでは、それら特殊・個別的な要素は、人間性＝普遍性によって乗り越えられることが少なくない。氏の論の力点が普遍性の考察の方にあることが、そのことを示している。

特殊な要素では、一九二〇年代日本の検閲制度について、氏が詳細に論じていることも付け加えておきたい。検閲制度は、前述の封建制度などのように、作中に表現として認められるものではなく、公権力が作家の創作活動を制限するものである。しかしながら、「將軍」や『支那遊記』などの作品における、表現や普遍性の問題を検討する上で、考慮する必要があると考えられる。本書の「再見『支那遊記』」では、『支那遊記』における中国の描かれ方が、「將軍の実像」では、「將軍」における帝国陸軍の普遍的な將軍表象が、それぞれ検閲制度・自主規制の問題を視野に入れて、論じられている。

芥川が作品を書く原動力となつたものとして、氏が本書で言及し、考察する新カント派やキリスト教やマルクス主義も、普遍的なものを前提としている。H・リッケルトやR・シュタムラー、H・コーエンなどの新カント派の哲学者たちは、『純粹

理性批判』、『実践理性批判』、『判断力批判』からなるカントの批判哲学を継承し、歴史主義や自然主義に対して批判的な立場をとる。そのカントの批判哲学は、個々の具体的な経験から独立し、かつ個々の経験に適用できる、人間の普遍的な認識の確立を出発点としている。また、カントが世界平和を実現する上で、国家や国民を超えた普遍的な世界市民体制を模索したことも、知られていよう。キリスト教やマルクス主義が人間の解放を謳つたことも、言を俟たない。

芥川たち近代の知識人が、これらの思想をどのように消化したかを、作品解釈を通して考えること。このことは、普遍的なるものを確立しようとするという、近・現代的な思考の特徴、可能性、問題点を明らかにする上で、重要な研究課題と考える。ここ十数年、氏は「近代日本の知識人の精神史」(『評伝長崎太郎』「はじめに」)をキーワードに、研究を進めている。その狙いの一つが、近代以降の知識人たち、特に芥川と出発を共にした豊島与志雄・恒藤恭・成瀬正一・松岡譲・藤岡蔵六らの一高群像が、普遍性の問題と格闘してきた軌跡を描くことにあるのは疑い得ない。それはまた、同時代を生きながら、東北花巻の地で、彼らとまつたく異なつた道を歩んだ宮沢賢治という個性にも共通項を見出すこととなる。本書を中心とした氏の著作群は、このような研究課題に取り組む上で、大切な指針となろう。

(二〇二二年五月 翰林書房 六一六頁 八六〇円＋税)

(九州大学人文科学研究院専門研究員)